釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

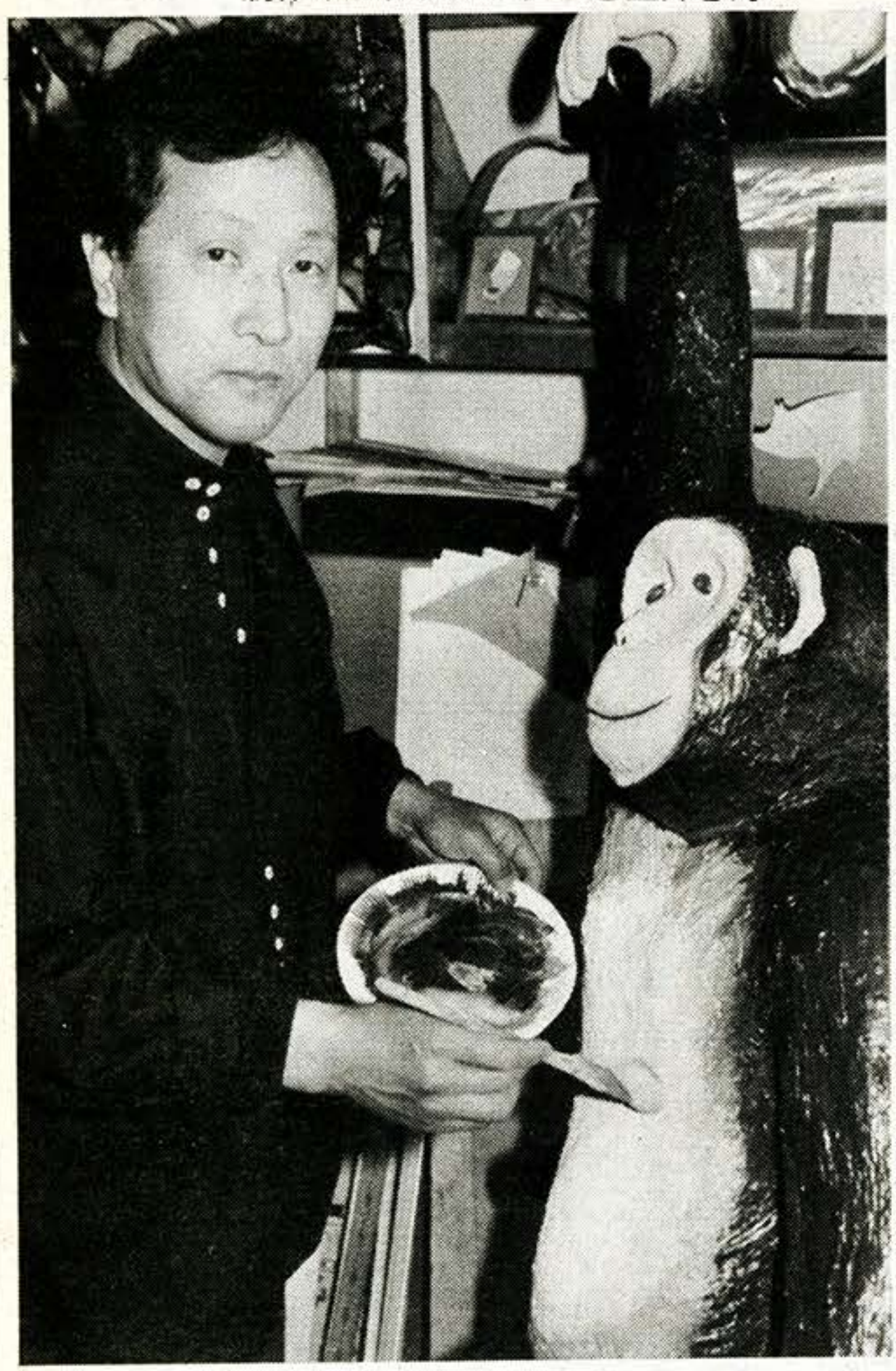
□1□

平成三年度(第二十回)釧新郷土芸術賞の受賞者は、絵画の金井清さん、書道の橋本智水さん、声楽の高橋寿子さん、それに二十回を記念して特別賞に釧路市出身で、日展会員、審査員の尾山幟画伯に決まった。芸術賞受賞の三人は、それぞれの芸術分野で研鑽を積み重ね、芸術性を追求してきた質の高い作品、演奏で今後の活躍が期待されている。特別賞の尾山画伯は日本画壇の重鎮として、昨年の日展で会員賞も受賞した。四人の横顔と活動の軌跡を紹介する。

大壁画制作にも友人と共に挑戦

金井さんのアトリエは現代美術作家らしい楽しさにあふれている。普通で言う画材は目立たず木や金属類、電動ミシンのこ、発泡スチロールなどが散る室内は、町工場の雰囲気が漂う。最近は版画制作にも手を染め、目下は大きなチンパンジーの仕上げにかかっている。「浴室に置いてみたい」という屈斜路湖のレジャー施設からの依頼だ。「実物の三倍くらい。こんな大きな動物を作るのは初めて。面白いものですね」と楽しそう。

制作中のチンパンジーと金井さん



現代美術に情熱燃やす

国際舞台でも活躍、評価

今年は春に東京晴海で開催されたアートエキスポ展に出品。同展は世界中の画廊が推薦する現代美術作家の作品を一堂に展示した国際美術展。「外国作家のエネルギーはすごい。これに対し日本人作家はあらゆる点で小さいとしか言いようがない」と舌をまく。その後は釧路市内のミヤタ画廊で作品展。ステンレスとアルミ板による〝顔〟シリーズと題した半立体作品が中心だった。また観光地への大壁画制作という未知のジャンルにも、友人と共に挑戦した。「今年は半分くらい芸術家らしい仕事をさしてもらったかな」とつぶやく。

昭和十七年、小樽に生まれ北海道自動車短大を卒業。二十年ほど前に二期、独立美術展に出品して入選。吉原治良賞コンクール、エンバなどのほか、現代美術への登竜門として著名な日本国際美術展に、連続三回入選を果たしている。いわば国内の現代美術関係の主なコンクールにはほとんど入選したと言っていい。

「こうしたコンクールで受賞・入選しなければ、現代美術の価値というものはなかなか認識してもらえない。日本の社会ではこの現代美術はまだ認知されていない面もある」と笑顔に無念さがチラリとのぞく。

ニューヨークでも個展も開く

昭和六十三年に現代美術のメッカ、ニューヨークにあるワードローレンス画廊で個展を開いた。これが縁でアバニアン画廊と作品の専売契約を結んだ事もある。海外での芸術体験が多いだけに、日本美術界の閉鎖的体質と無理解さにはついていけない面もあるようだ。「もう一回くらいアメリカに行って、本格的な個展を開きたい。ただ時間とお金とめぐり合わせが良ければですが」と夢を描く。今回の受賞についても「本当にうれしい」と喜び「現代美術は今面白い。私の一生の仕事にもなってしまった。これからも自分の持っているものをすべて表現して最後を迎えたい」と秘めた覚悟を見せる。

絵画

金井 清さん

釧路市共栄大通八の二